

京都府田辺町

# 興戸遺跡第9次発掘調査概報

—都市計画街路新田辺駅前線予定地の調査—



1992

田辺町教育委員会

## 序

今回ここに報告するものは、田辺町が交通渋滞解消のため建設を計画している都市計画街路新田辺駅前線内にある興戸遺跡の調査の概要です。

この遺跡は、近年特に開発の進む町中央部にあり、しかも本町を代表するような大規模な遺跡のひとつです。これまでに行われた調査で、縄文時代のおわり頃から人々の生活が続いている状況がわかってきています。

今回の調査でも、古墳時代の住居の跡や奈良時代の幹線道路である山陽道に関係が求められる溝などを発見したばかりでなく、奈良時代にあっては、非常に貴重品扱いされた二彩陶器を発見することができました。

このように、発掘調査によって田辺町の歴史の古い部分が徐々に明らかになっていく場合が増えています。

最後になりましたが、調査にあたって、関係部局・関係機関をはじめ多くの方々のご協力・ご指導をいただきましたことを厚くお礼申しあげます。

平成4年3月

田辺町教育委員会

教育長 吉山勝平



2 トレンチ全景（北から）

表紙：興戸遺跡全景（南から）

## 例　　言

- 1 本書は、田辺町教育委員会が行った都市計画街路新田辺駅前線建設予定地内に所在する興戸遺跡の第9次発掘調査概要の報告である。
- 2 調査は田辺町建設部都市整備課の依頼を受け、平成3年度事業として行った。
- 3 現地調査は平成3年7月16日に開始し平成4年2月29日現在調査中であり、本書印刷期間の関係から同日までの概要報告である。
- 4 調査の組織は次のとおりである。

調査主体・・・田辺町教育委員会

調査責任者・・・田辺町教育委員会 教育長 吉山勝平

調査指導・・・京都府教育委員会・京都府立山城郷土資料館

調査担当者・・・田辺町教育委員会 社会教育課 鹿野一太郎

高橋 文夫（平成3年9月1日より）

調査事務局・・・田辺町教育委員会 社会教育課（課長 奥西安己）

調査参加者・・・大西 都・兎本 久美・村田 和弘・武石 匠司・岩本 貴・久家 隆芳・

岡田憲一・前田 泰明・徳永 真司・丹澤 愛紀・藤林摩弥子

- 5 調査期間中及び本書を作成するにあたり、次の方々よりご教示を得た。記して感謝の意とします。

[順不同・敬称略]

足利健亮（京都大学）、鈴木重治（同志社大学）、堤圭三郎・肥後弘幸（京都府教育委員会）、

高橋美久二（京都府立山城郷土資料館）、平良泰久・伊野近富・小池寛（京都府埋蔵文化財調査研究センター）

- 6 調査を実施するについて、京都府田辺土木事務所、太田藤三・島潔・小西惣次（田辺区）、里西文彦（興戸区）の各氏にはご協力を賜った。記して感謝します。

- 7 遺物・図面の整理には兎本・村田・武石の多大の協力があった。なお、本書の執筆・編集は鹿野が行った。

## 目　　次

1 はじめに.....	1
2 位置と環境.....	2
3 調査経過.....	8
4 調査概要.....	10
5 遺　　物.....	23
6 ま　　と　　め.....	26

## 1 は じ め に

興戸遺跡は、京都府綾喜郡田辺町大字田辺から大字興戸にかけて位置する、南北約900m・東西約500mに及ぶ遺跡として知られている。

これまでの調査で、縄文時代晚期から中世にかけてのほぼ各時代・各時期の遺構・遺物がみつかっており、田辺町においても有数の遺跡とみられる。

田辺町建設部では、平成2年度より都市計画街路新田辺駅前線の用地取得を計画し、平成2年3月田辺町教育委員会に対し、埋蔵文化財調査についての協議があった。当委員会では、当該地については興戸遺跡に含まれていることから以前より事前の発掘調査が必要である旨を連絡していたところでもあった。その後、平成3年4月田辺町建設部都市整備課より、当委員会に対し発掘調査の依頼があった。

現地調査は、平成3年7月16日より開始し、平成4年2月末現在も調査中である。

なお、建設部都市整備課をはじめ京都府田辺土木事務所などの関係諸機関にはお世話になった。また、猛暑のなか、厳寒のなか調査に参加している諸氏に多大の労苦をかけていた。記して心から感謝したい。



調査地位置図 (S = 1 : 20,000)

## 2 位置と環境

田辺町は京都府南部に広がる南山城平野のほぼ中央、伊賀山中に源を発する木津川の左岸に位置する。町の北は八幡市、西は生駒山系に連なる京阪奈丘陵を界して大阪府枚方市・奈良県生駒市、南は相楽郡精華町、東は木津川を挟んで城陽市・綴喜郡井手町にそれぞれ接している。

町の西部は丘陵地帯が広がり、東部は北流する木津川によって形成された沖積平野が広がる南北に長い町である。西部丘陵地帯から沖積平野を横切り木津川に流れる諸河川のうち、手原川・天津神川・馬坂川・防賀川・普賢寺川・遠藤川などは平野部で天井川となり、ほぼ南北に走る鉄道や道路、人家の上を川が流れるという一種独特の景観を描いている。しかし、近年の開発により景観は刻一刻と変化している。

興戸遺跡は田辺町のほぼ中央部、西の丘陵地帯から東の平野部に張り出した台地上を中心に戻展する南山城でも有数の遺跡であり、遺跡地内を斜めに府道八幡木津線・J R学研都市線(片町線)・近鉄京都線が通り、中央やや北寄りを東西に貫く国道307号線バイパスが建設中である。府道を境に東側は一段低くなり、そこから東に向けて徐々に地形は低くなっていく。

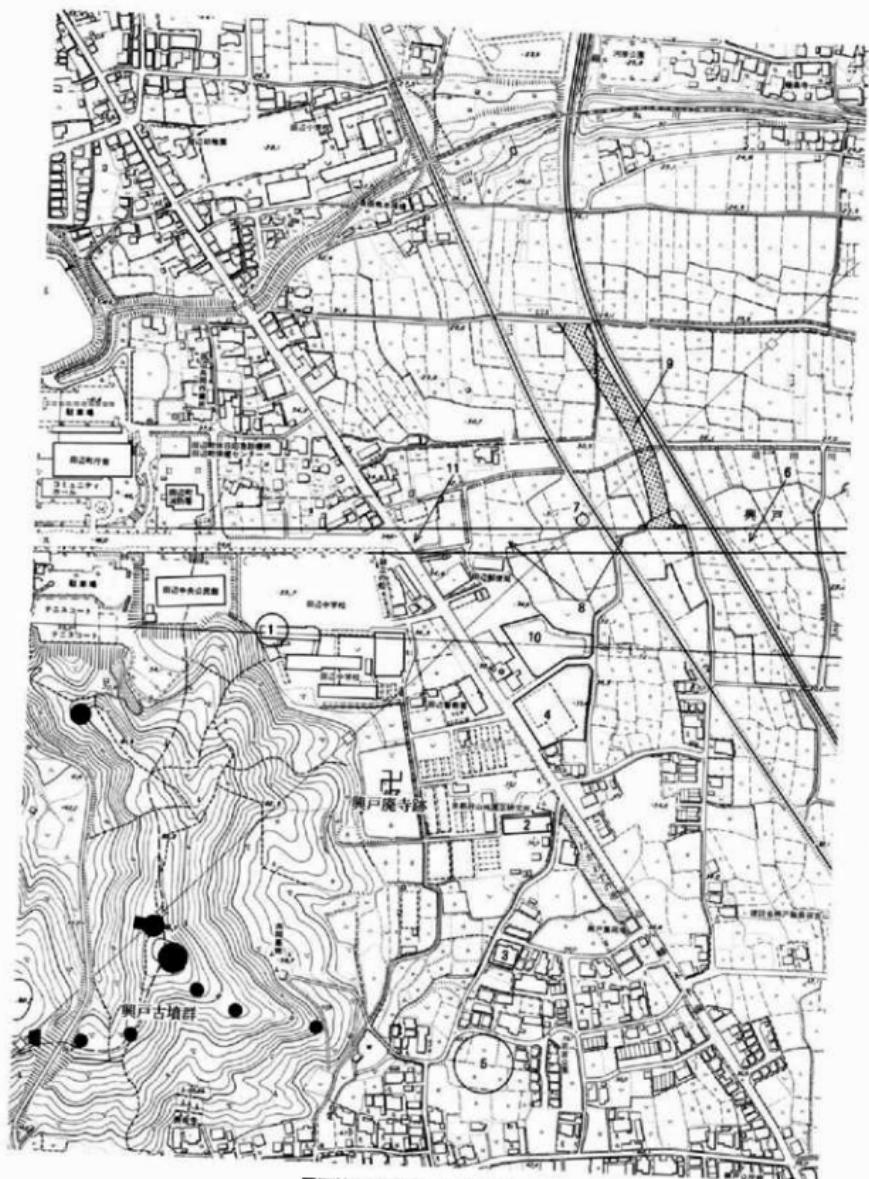


調査地遠景（西から）



- 1. 舞戸遺跡 2. 西浜遺跡 3. 伝道林遺跡 4. 青上遺跡 5. 新遺跡 6. 稲葉遺跡 7. 東神原遺跡
- 8. 朝倉遺跡 9. 天理山古墳群 10. 小欠古墳群 11. 尼ヶ池遺跡 12. 新宮前遺跡 13. 鍵田遺跡
- 14. 橋折遺跡 15. 散布地 16. 竹ノ脇遺跡 17. 田邊遺跡 18. 田辺城跡 19. 舞戸庵寺 20. 散布地
- 21. 五反田遺跡 22. 下ノ河原遺跡 23. 南垣内遺跡 24. 草内城跡 25. 宮ノ後遺跡 26. 舞戸古墳群
- 27. 郡家古墳 28. 舞戸宮ノ前遺跡 29. 酒鹿古墳 30. 川原谷遺跡 31. 舞戸宮ノ前遺跡 32. 舞戸城跡
- 33. 飯岡遺跡 34. 飯岡車塚古墳 35. 弥陀山古墳 36. ゴロゴロ山古墳 37. 美勝山古墳 38. 十眾古墳
- 39. 天神山遺跡 40. 野神遺跡 41. 下司古墳群 42. マムシ谷窯跡 43. 新宗谷古墳 44. 新宗谷窯跡
- 45. 那谷遺跡 46. 散布地 47. 下瀬川遺跡 48. 散布地 49. 散布地 50. 城館跡 51. 散布地 52. 新宮前遺跡
- 53. 新宗谷遺跡 54. 田中遺跡 55. 古屋敷遺跡 56. 大御堂古墳 57. 普賢寺跡 58. 城館跡 59. 散布地
- 60. 城館跡 61. タマゾ遺跡 62. 口駒ヶ谷古墳 63. 口駒ヶ谷遺跡 64. 南山遺跡 65. 南山城跡
- 66. 木原屋敷跡 67. 西羅遺跡 68. 山崎2号墳 69. 山崎1号墳 70. 山崎3号墳 71. 山崎北遺跡
- 72. 直田遺跡 73. 宮の下遺跡 74. 遠藤遺跡 75. 山崎遺跡 76. 飯岡横穴

A. 酒鹿窯庭園・酒鹿文化財環境保全地区 B. 棚倉孫神社文化財環境保全地区  
C. 昭和神社文化財環境保全地区



周辺地形図 ( $S = 1 : 5,000$ )

数字は調査次数

周辺の遺跡を見てみると、すぐ西の丘陵上には総数10基を数える興戸古墳群が存在する。この中の2号墳は寿命寺山古墳の名で古くから知られ、直径28mの円墳ではあるものの、主体部は割竹形木棺を納めた粘土櫛で内部より内行花文鏡・管玉・鍔形石・車輪石・石劍・鉄剣などがみつかり、円筒埴輪のはか家形埴輪も存在した典型的な畿内前期型古墳である。碧石製腕飾類が三種ともみられ、それらの点数も相当数あることは注目すべきことながらである。5号墳は弥生時代後期の方形台状墓であることが発掘調査で確認されている。丘陵裾には白鳳時代から平安時代初期頃までの瓦がみつかっている興戸廃寺がある。田辺公園野球場の西側丘陵には南北400m以上・



興戸 5号墳



田辺遺跡方形台状墓

東西40~140m以上の範囲で中世の田辺氏の居城という田辺城跡が存在する。丘陵先端部で行った城跡の調査では、戦国時代末期に焼失したらしい礎石建物跡が、下層からは弥生時代後期終末ないし庄内期の、鉄剣が副葬された方形台状墓が土器棺とともにみつかっている。野球場の北東側丘陵の南斜面は、古代の有力者層の墓域だったようで飛鳥時代末頃・平安時代（9~10世紀）の藏骨器や木棺墓がみつかっている。9世紀初め頃とみられる藏骨器のなかには全面に線軸が施された四足壺もある。また、この付近の府道八幡木津線は古代の山陽道をそのまま踏襲しているといわれる。

このようなことから、古代においてこの付近がひとつの中心地であったことがうかがわれる。

興戸遺跡については古くから散布地として知られていたが、今回を含め11回の発掘調査



奥戸遺跡第10次調査・平安時代の井戸



同上 木枠部分

められることから、官衙的な建物跡群とみられ注目される（第2次調査）。

昭和62年（1987）には、山城田辺郵便局新庁舎建設に伴う調査で古墳時代前期の貯蔵穴様土坑2基・石包丁片などがみつかっている（第4次調査）。また、小字郡塚で行った遺跡の南限推定地付近の調査では、古墳時代の溝、平安時代の溝など多くの土器類とともにみつかり、遺跡は更に広がりをもつことを確認した（第5次調査）。

平成元年度から3年度（1989～1991）まで行われた、遺跡地内を東西に横断する国道307号線バイパス建設に伴う調査では、東部で弥生時代中期の壺棺墓・土坑墓、弥生から古墳時代の溝、ほぼ中央部で奈良時代の掘立柱建物跡・柵列・溝・井戸、平安時代の掘立柱建物跡・溝、西部では古墳時代後期もしくは飛鳥時代の水田跡など多種多様のものがみつかっている。特に、奈良時代の溝・建物跡などは方位がN33°Wで府道八幡木津線と同じ方位

が行われている。

この遺跡で初めて発掘調査が行われたのは、昭和50年（1975）に田辺中学校校地内で行われたものであった。わずか5日間の調査ではあったが、古墳の副葬品とも考えられる石製の玉類や古式の須恵器などがみつかっている（第1次調査）。

昭和54年（1979）には京都府立山城園芸研究所敷地内で行われた調査で、弥生時代の溝、古墳時代後期の竪穴住居跡、奈良時代の掘立柱建物跡・溝、平安時代の掘立柱建物跡などが、弥生時代中期中葉から後期前半、古墳時代後期、綠釉陶器を含む奈良・平安時代の土器類とともにみつかっている。特に、奈良時代の建物跡群はほぼ正南北の方位をもち、規格性が認められる



興戸遺跡第10次調査地遠景（東から）

であり、この府道がそのまま古代山陽道である可能性がますます高まること、一町を106.59m程度とすると柵列・溝がほぼ合致することなど、古代の景観復原に大きな成果があげられた。遺物についても、縄文時代晩期末の長原式に属す深鉢片、弥生時代中期のもの、弥生時代後期から古墳時代初期にかけてのもの、古墳時代後期、奈良時代直前から平安時代前期にかけての遺物類、12世紀後半から13世紀にかけてのものなどがみつかっている。特に8世紀後半から10世紀中葉までのものには、土師器・須恵器のほか墨書き土器・緑釉陶器・灰釉陶器といった一般集落ではあまり見られない土器類や神功開宝・万年通宝の銭貨、ガラス小玉、直径約1m・残存高1.5mの巨木をくりぬいた井筒や斎串といった木製品など多種類のものがみつかっている（第6・8・11次調査）。

平成3年（1991）仮称町立総合福祉社会館建設に伴う事前調査は、第4次調査地のすぐ北側で行ったものであるが、平安時代（10世紀中葉）の井戸がみつかった。これは、たて板組横棧どめのもので、底部に直径約1m・高さ0.35m以上のヒノキをくりぬいたおけ状の水溜をおくという、めずらしい構造のものである。平安時代前半を中心とした遺物が調査地からみつかったが、緑釉陶器・灰釉陶器の割合が約2%を占めている（第10次調査）。

以上のような環境及び発掘調査の結果により、興戸遺跡は弥生時代中期から続く遺跡であること、しかし開始は縄文時代晩期までさかのぼる可能性があること、各時代の中でも特に奈良時代は官衙的な様相を示し、平安時代にも有力者層の存在がうかがわれるなどが判り、田辺町はもとより南山城地域においても注目される遺跡であるといえよう。

### 3 調査経過

今回の調査対象地となったのは、町道深田一ノ坪線を北端とし、府道の東側に2本平行するように走るJR学研都市線（片町線）と近鉄京都線の間を通り、南端は遺跡の中央北寄りを東西に横断する現在建設中の国道307号線バイパスと接続する都市計画街路の道路敷地部分で、幅15～18m・延長約200mを測る。

わずかの荒地のほかは、水田として耕作されている状況であった。現在は調査地の中央南寄り、南端から北へ75m付近を西から東に池田川が流れているが、河川改修を行ったためであり、以前はもう10m程南側を流れていたとのことである。この池田川を境として北側は一段地形が低くなり、さらに北に向けて徐々に低くなっている。

このため、池田川より北では小規模の調査区域を設定し、その状況により区域の拡大等を判断することとし、川より南側は国道307号線バイパスの事前調査の成果、ことに中央部での調査成果を参考に、面での調査を行うこととした。

当初は、多くの遺構などをみつけることが十分予想される国道バイパスとの接続部から調査を行う予定であった。しかし、この部分は現在も行われているバイパス工事の資材置き場、重機などの通路として利用されており、調査のできる状態ではなかった。このこと



2 トレンチ調査前（南から）

は、工事側（開発側）と文化財側との連携がうまくとれていなかつたためであり、両者とも今後に課題を残すこととなった。

調査は平成3年7月16日から開始したが、前述のような事態であったため、調査対象地の北端での確認調査から始め、その間にバイパス工事との調整を図ることとした。しかも、調査着手時点では用地買収が終わっていないかったため、水田として耕作されている場所もあり、計画どおり調査を進めることができなかつた。

8月下旬から1トレンチ、水路を挟み北側に2トレンチを設定し調査を行つた。2トレンチは比較的に面での調査を行うことができたばかりでなく、多くの遺構・出土遺物のほとんどのものが、ここからみつかつた。11月下旬になっ



作業風景



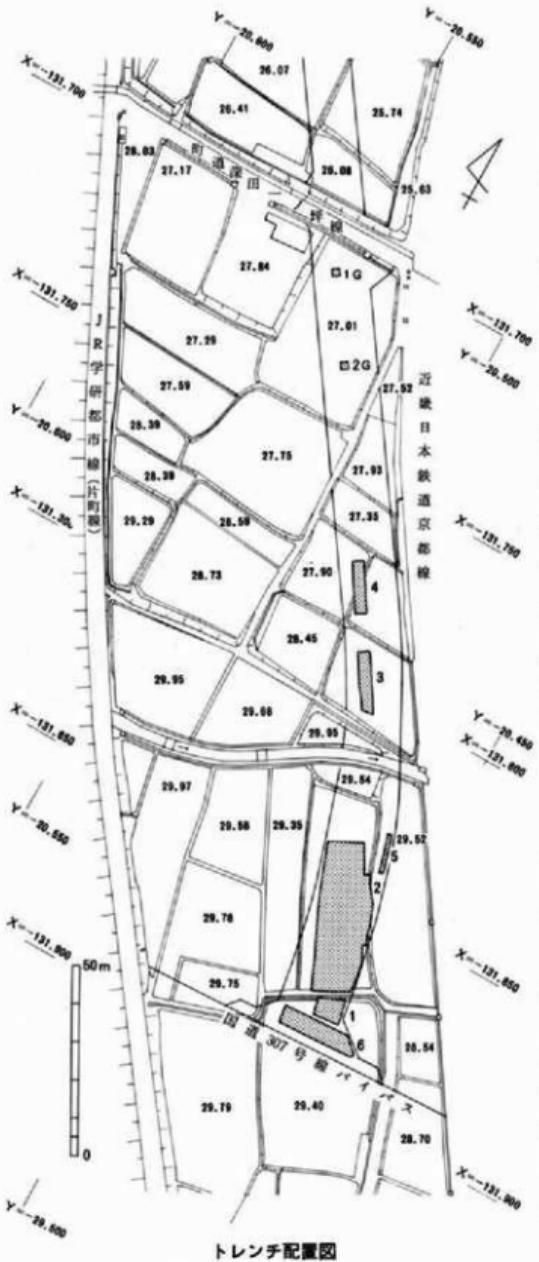
同 上

て、池田川の北側つまり一段地形が低い部分に3トレンチ・4トレンチを、2トレンチの東側の水田も一段低くなっているが、ここに5トレンチをそれぞれ設定した。また、必要に応じトレンチの拡張を行つた。平成4年1月中ごろになり、ようやくバイパスとの接続部分の調査ができるようになり、6トレンチを設定した。耕作土などの除去に際し、1・2・6トレンチは重機を用いたが、他のトレンチ及び拡張部分などは人力で行った。平成4年2月27日には報道関係者への成果発表を行つた。

なお、現地での遺構の実測はトレンチにあわせた任意座標で行い、その後、国土座標（第VI座標系）に変換した。標高は、国道バイパスでの調査と同じ府道沿いのポイント34.278mを用いた。

## 4 調査概要

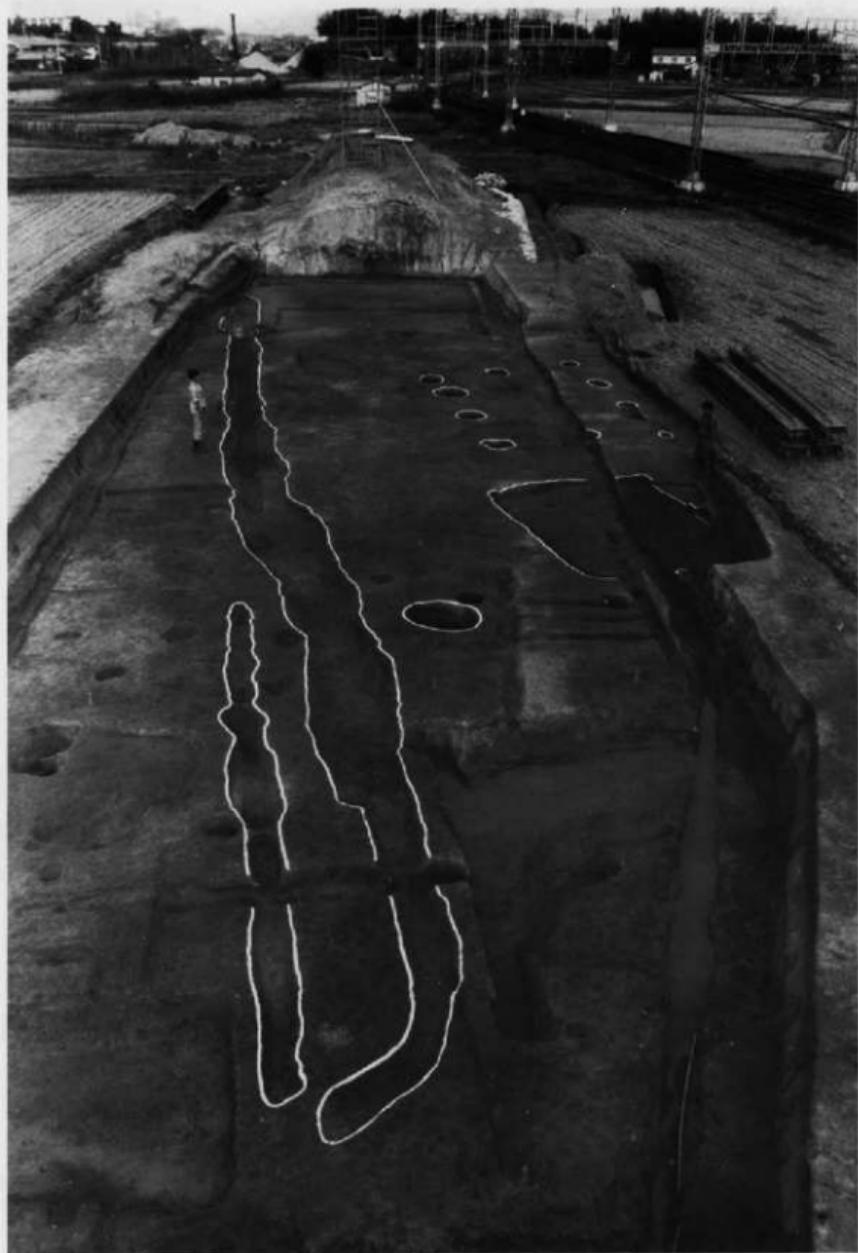
調査区の中央やや南側を東流する池田川を境に、北側は一段低くなり、さらに北に向けて徐々に低くなっている地形であり、川の南側では比較的高まった地形が広がる。川の南側に設定した1・2・6トレンチの基本的な層位は上から表土（耕作土）・床土・灰色系砂質土（中世の耕作土か）・褐色系砂質土（奈良時代を中心とした遺物包含層）の順で2トレンチ南側ではこの下に褐色系粘質土（包含層）がみられる部分がある。奈良時代・古墳時代の造構は、この包含層の下にある淡灰褐色系砂質土の上でみつかる。一方の、川より北側の3・4トレンチ及び2トレンチ東側の5トレンチでは表土（耕作土）・床土・淡灰褐色系砂質土（中世の耕作土）で砂礫層ないし粘土層となる。また、調査区北端は、地名も大字田辺小字深田となり、地表下2mでも黒色の粘土層・シルト層が堆積しており、地元の人たちが言うように、かつては沼地だった様子である。では、造構がみつかった1・2・6トレンチを中心に概要を述べる。



トレンチ配置図



調査地全景（南から）



2 トレンチ全景（南から）



1 トレンチ全景（東から）



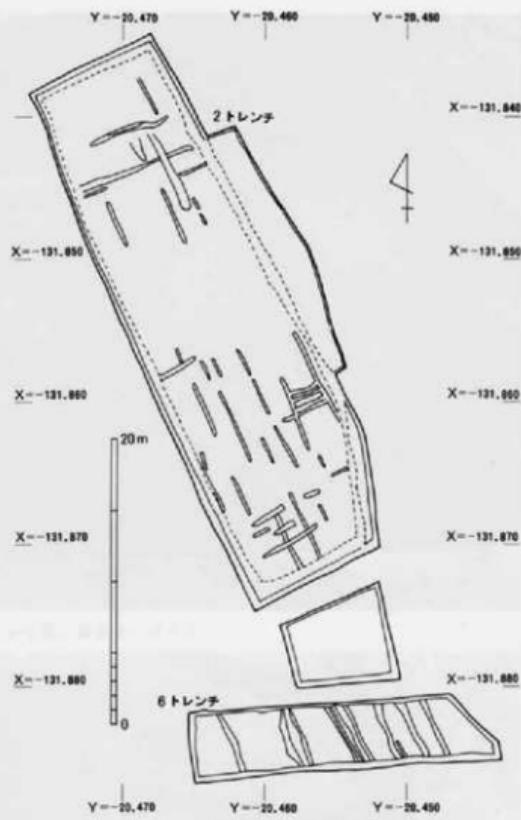
6 トレンチ SD17（東から）

### 1 レンチ 南側で南北0.8m

×東西0.6mの掘方と掘方の下層部とみられる南北0.45m×東西0.3mの瓦溜まりがそれぞれ1ヶ所みつかった。掘方方向が異なり同一の建物などにはならないが、前者も下層部には瓦片がみられ、一部は地山以下まで瓦がくいこんでいる。ともに奈良時代か。

2 レンチ 奈良時代を中心とした遺物包含層の上面で平安時代以降とみられる耕作に伴う溝をみつけた。溝のほとんどが北西～南東方向のもので、方位は真北に対し西に約26度振れている。

この包含層を除いたところ、トレンチの中央部では、ほぼ東西方に約10mの幅で砂礫層帯が認められた。この砂礫の部分は高く、以北・以南ではさらに別の包含層



2・6 レンチ溝群平面図

がみられた。この包含層も上層と同様奈良時代を中心とした遺物を含み、奈良時代・古墳時代の遺構はこの包含層の下及び砂礫層の上面でみつかった。

奈良時代のものとして溝S D01・SD05、掘立柱建物跡S B15、塙跡S A16などが、古墳時代のものとして竪穴住居跡S B07、溝S D08などがそれらみつかった。

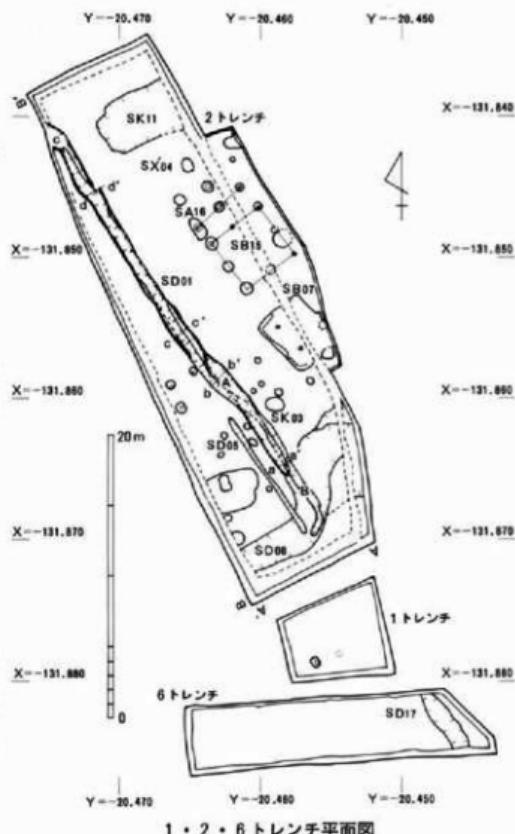
溝S D01は北西～南東方向のものでトレンチ南端では途切れるが、トレンチを継続するよう北端の西壁に達する。方位は真北から約33度西に振れている。遺物の含まれかた、断面観察などからみて3時期(A～C期)が考えられる。古いものは(A期)幅1～1.2m、深さ0.2mでトレンチの南側部分に長さ約10mほどだったようで、次の時期(B期)は幅0.5～0.8m、深さ0.2～0.3mのやや幅の狭いものが、トレンチの南端付近から北端付近までの長さ約33mのものが確認できる。溝の南側10mに渡ってはすぐ西側に同時期に機能してい

たとみられる溝SD05（幅0.3m、深さ0.3m、長さ9.8m）が平行してあり、このSD05を包むよう屈折し終わっている。新しい時期（C期）のものは、幅1~1.3m、深さ0.2mでトレンチ北側でのみ確認できた。長さ17.5m以上あり、トレンチ西壁付近で西に屈折するかのように西壁に達する。これ以後の改修がなかったためか、C期の部分では須恵器を中心とした多くの遺物がみつかった。

掘立柱建物跡SB15はトレンチの中央、溝SD01の東側でみつかった。溝SD01と同じ方位で、2間×2間（4.2m×4.2m）の総柱建物とみられる。掘方は円形で、大きなものは直径0.8mを測る。北側に2間分（4.2m）の目隠し塀SA16を伴う。

竪穴住居跡SB07はSB15の南側でみつかった。当時の地形にあわせたためか、北西~南東方向に長く、4.3m×3.7mを測る。深さ0.2mで、東辺の中央より南部部分に造り付けのかまどを設ける。かまどの遺存状態は悪い。床面の西半分には周壁溝がめぐるが、西辺の一部では途切れる部分がある。この切れた部分の北側は溝の幅も広く、住居の出入口を想定できる。遺物は古墳時代後期の土師器・須恵器が少量みつかった。なお、下層で別の住居跡と重なっている。

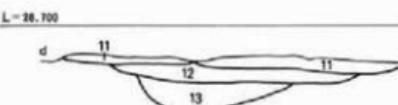
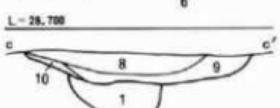
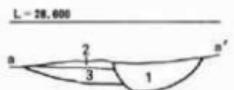
溝SD08はトレンチ南側で西から東へトレンチを横断するようにみつかった。古墳時代前期の遺物がほとんどだが、少量後期の遺物も含むものである。埋土は暗灰色粘質土で、幅はトレンチ西端で約2m、深さ0.2mだが、途中で蛇行し、東側では深いところは枝別れしており、上面幅6.5m、深さ0.5~0.6mを測る。蛇行するところの南側底から、直径約



1・2・6 トレンチ平面図



2 レンチ作業風景



- |            |            |                  |
|------------|------------|------------------|
| 1. 明灰褐色粘質土 | 6. 黄灰褐色土   | 11. 明灰褐色粘質土(包含層) |
| 2. 粉褐色土    | 7. 淡黄灰色粘質土 | 12. 明黄白褐色砂質土     |
| 3. 精茶褐色砂質土 | 8. 黄灰褐色土   | 13. 明灰褐色粘性砂質土    |
| 4. 淡黄褐色砂質土 | 9. 淡灰黄褐色土  |                  |
| 5. 荚灰褐色砂質土 | 10. 淡黄褐色土  |                  |

SD01 A埋土：2～7、SD01 B埋土：1・13、SD01 C埋土：8～10・12



2 レンチ SD01 土層断面図



2 レンチ SD01 C 遺物出土状況（北から）



2 トレンチSD01全景（北から）



2 トレンチSB15・SA16（南から）

8 cm、長さ約2.5mの棒状の木製品がみつかった。両端を尖らせるように削った、まっすぐなものである。溝の底は砂であるが、この砂の中や、溝の壁と考えた砂質土からも古墳時代前期の遺物がみつかり、これらもSD08の埋土とすれば自然の流路の可能性もある。

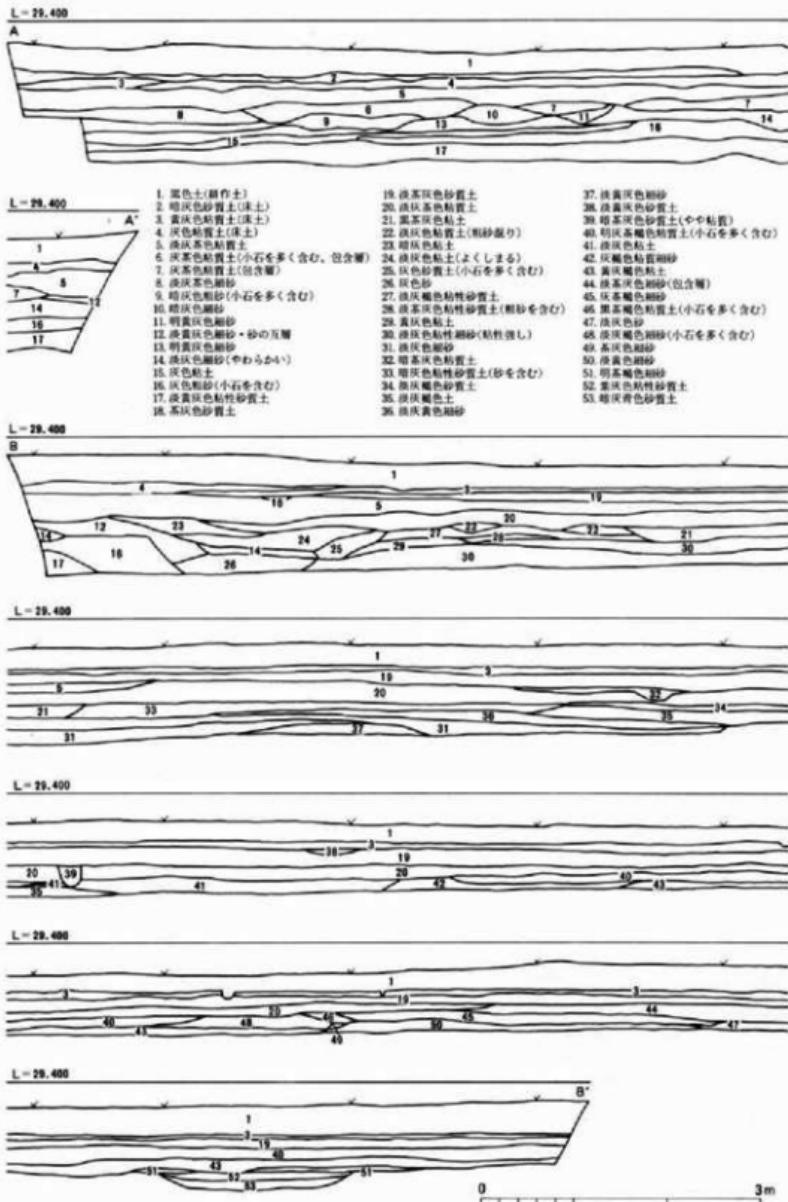
このほか、古墳時代とみられる埋甕（SX04）・小土壤群（SK03など）・不整形なおちこみ（SK11）・ピット、奈良時代とみられるピットなどがみつかっている。

6 トレンチ 2 トレンチ同様に遺物包含層の上面で平安時代以降とみられる耕作に伴う



2 トレンチSX04（南から）

溝を多数みつけた。方位も同様に真北から西に約26度振れている。トレンチ東端で奈良時代の溝SD17をみつけた。2 トレンチの溝SD01と同一線上にあり、幅約1 m・深さ約0.2 mである。このほか、遺物包含層の下の面から奈良時代の掘方になるとみられるピット・古墳時代のピットなど多くのものがみつかっている。



2 トレンチ南壁・西壁土層断面図



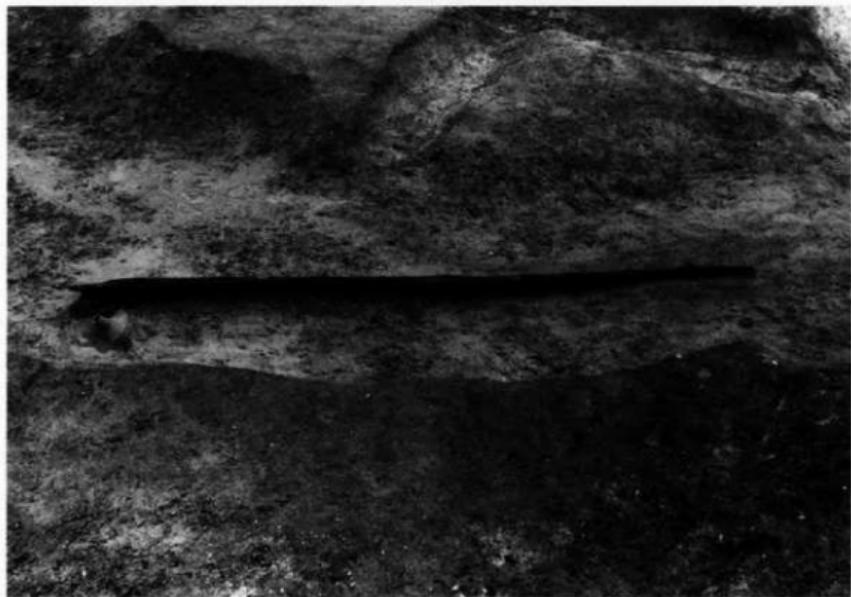
2 トレンチ S B07 (南から)



2 トレンチ S D08 (西から)



2 トレンチSD08 東部土器出土状況（北から）



2 トレンチSD08 木製品出土状況（南から）



3 トレンチ・4 トレンチ全景（南から）

## 5 遺 物

各トレンチの遺物包含層及び各遺構から多くの遺物がみつかっているが、奈良時代の S D01・S D17、古墳時代の S B07・S D08、2トレンチ包含層については一部を図化できたので、それらについて報告する。

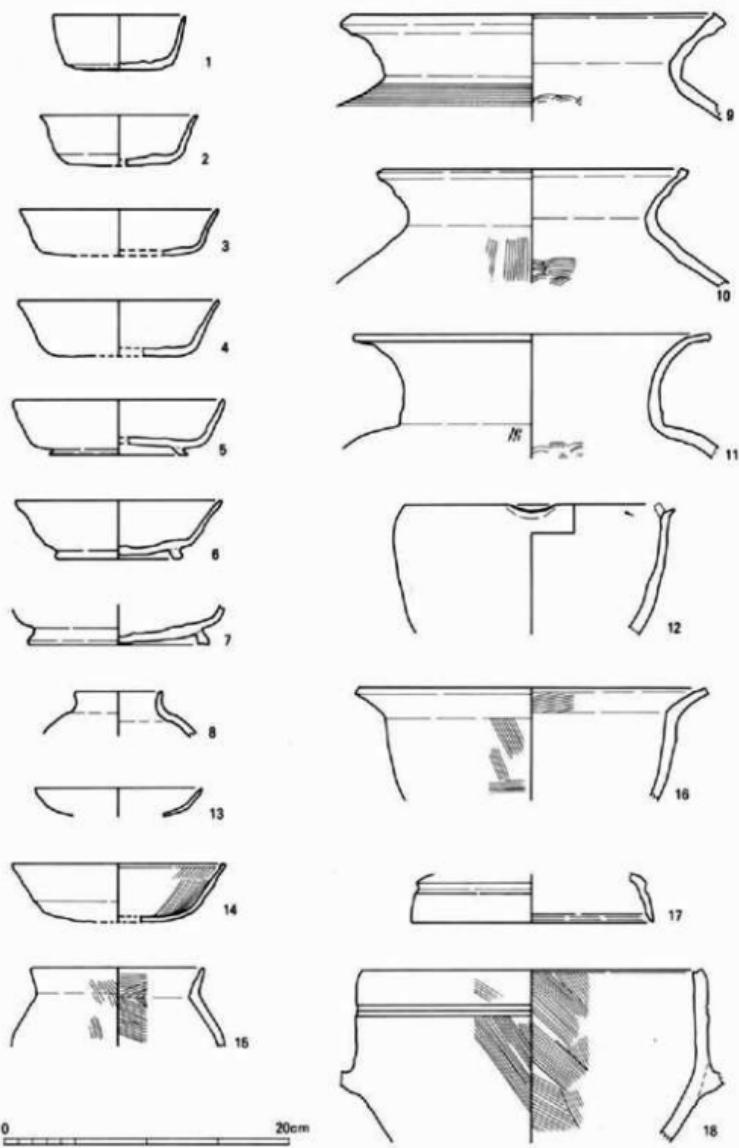
**S D01・S D17 (1~16)** S D01は3時期に分かれるものと考えているが、遺物のはほとんどは最終時期(C期)のものからみつかった。この時期のものでは須恵器が多く土師器は少ない。須恵器には杯A・杯B・杯B蓋・甕・壺などがあり、甕が比較的多い。土師器には皿・椀・甕などがある。瓦が少量のほか、漆膜かとみられるごく小片の朱色を呈したもののがみつかった。ここで図示したのはすべて最終時期(C期)のところからみつかったものである。8世紀のものを主体とするが、14のように内面に二段の放射状暗文をもつ古いものもある。13はなでで終わる小ぶりの皿である。16は小片のためよくわからないが、甕として図示した。12はS D17からみつかった片口鉢である。

**S B07 (17~18)** 須恵器・土師器がみつかったが量的には少ない。各々1点を図示した。17は天井部につまみをもつ高杯の蓋である。18は両側に把手のつく甕になるとみられるもので内外面ともハケメがよく残る。

**S D08 (19~25)** 古墳時代前期(布留式)の土師器が多くみつかった。二重口縁壺・甕・高杯・小型丸底土器などがある。みつかったものの多くは器表面の残りが悪く、調整については不明のものがほとんどであるが、壺・甕の外面はハケ、内面はヘラケズリを残すものが多い。小型丸底土器23をみると、口縁部は短く、腹部のほうに最大径があり、布留式の中でも新しい時期のものである。

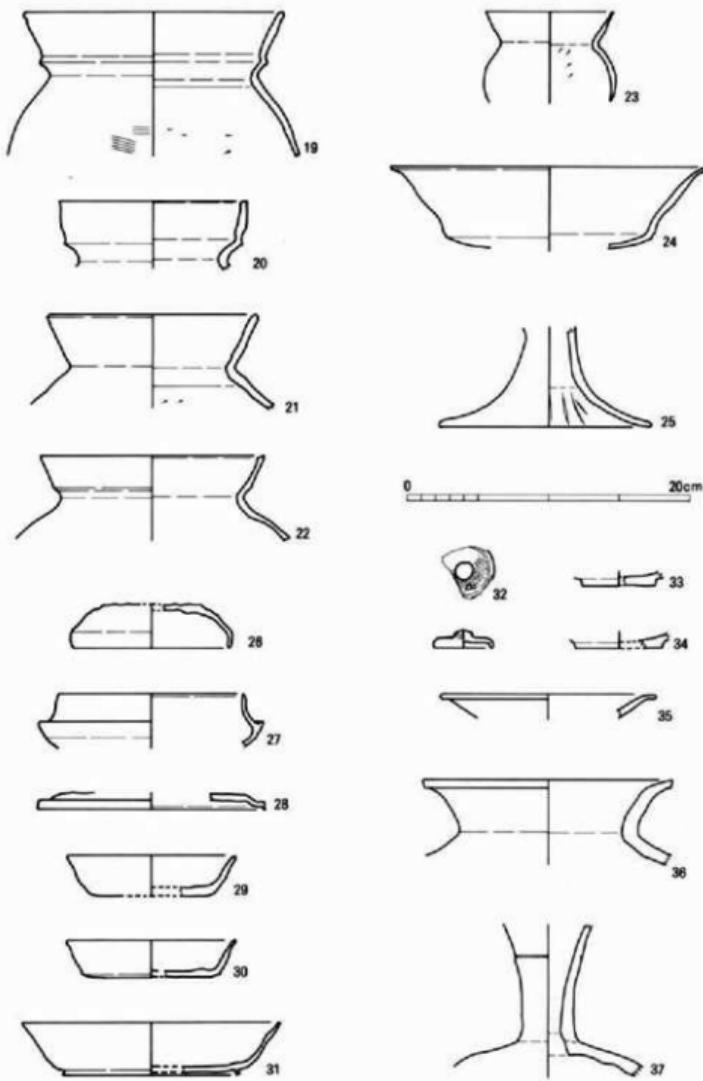
**2トレンチ包含層 (26~37)** 須恵器・土師器を中心に、瓦や製塙土器、二彩陶器・緑釉陶器・灰釉陶器といった当時の高級品、鉄釘などもみつかっている。高級品やほとんどの製塙土器はトレンチの南端付近からみつかり、北端付近では摩滅している破片が目に付いた。時代的には奈良時代のものを中心とし、弥生時代から平安時代前期頃までのものが含まれる。二彩陶器32は小壺の蓋である。胎土はあまり精良ではなく、直径2mmの大砂粒を含む。釉の残りも悪く、天井部の約3分の1に綠釉とわずかの白釉が残る。緑釉陶器33・34は高台部で、どちらも胎土は白色の軟陶のものである。灰釉陶器35は皿の口縁部で、内面にのみガラス質の釉がかかる。

これらの他にも、多数のものがみつかっており、整理が終了した段階で再検討したい。



遺物実測図(1)

SD01: 須恵器(杯A・1~4、杯B・5、6、壺・7、8、壺・9~11) 土師器(皿・13、碗・14、壺・15、16)  
 SD17: 須恵器(片口鉢・12)  
 SB07: 土師器(高杯蓋・17) 土師器(瓶・18)



遺物実測図(2)

S D08 : 土師器 (蓋・19~21、甕・22、小型丸底土器・23、高杯・24、25)  
 2トレンチ包含層 : 須恵器 (蓋・26、28、杯・27、杯A・29、30、杯B・31、甕・36、壺・37)  
 二彩陶器 (蓋・32) 緑釉陶器 (底部・33、34) 灰釉陶器 (皿・35)

## 6 ま と め

今回の調査は興戸遺跡の北寄りに南北に計画された都市計画街路の延長約200mを調査対象地としたものであった。調査は現在も継続中であるが、これまでにわかったことを時代別に簡単にまとめておきたい。

**弥生時代** 遺物包含層のなか及び奈良時代のベースとなった層から中期に属すとみられる土器やサスカイトの剥片がみつかっている。これらの層は調査地の西側から流れてきた層であるとみられる。一方、国道バイパスに伴う第6次調査の、今回の調査地の東約100mのところで中期の土器棺や土坑墓の可能性の高いものがみつかっており、ごく近いところに集落があったことが予想される。

**古墳時代** 前期の土器を含む溝S D08がみつかった。西から東に流れていたものであり、やはり西側に集落があったことが予想される。

豊穴住居跡S B07がみつかったことにより、後期の集落が確認できた。第2次調査でも豊穴住居跡はみつかっているが、これは、府道の西側つまり高いところ（標高37m付近）での集落であり、今回の調査により低地（標高28.5m付近）においても集落が展開していたことが明らかとなった。

**奈良時代** 溝S D01及びS D17は同一線上にあり、さらにこの南延長上には第8次調査でみつかった溝S D8235が存在する。この延長は75m以上となり、当時の土地区画の重要な溝であったことがうかがわれる。

ところで、この溝の方位はN33度Wであり、これは古代の山陽道をそのまま踏襲しているこの付近の府道八幡木津線の方位と同じである。このことは、逆に言えばこの溝と現在の府道の方位が一致するので、奈良時代の山陽道の存在を確認したともいえよう。つまり、まず道が整備され、道周辺ではその道に規制された土地区画が行われたと考えられる。また、府道の中心から溝の中心までの距離は略測で約223mを測る。

倉庫とみられる建物跡S B15がみつかり、当時の集落がこの付近まで拡がりをもつていてことを確認した。

遺物では、11回に及ぶこの遺跡の調査で、初めて小壺の蓋ではあるが二彩陶器がみつかったことは大きな成果である。これは通常、都城や寺院・官衙でそのほとんどがみつかるものであり、今回みつかったことにより、この遺跡が奈良時代には官衙を含んでいた可能性がますます高まったことになろう。ただ、今回の調査地が官衙の一部であるとは考えにく

く、その中心地は依然不明確であり、やはり西側の高い部分に存在したものと考えたい。また、瓦もみつかっていることから、瓦葺の建物などの存在も考えられる。

**平安時代** 明らかなこの時代の遺構は確認していないが、遺物の中には灰釉陶器といった一般集落ではあまりみられないものも含まれる。この灰釉陶器をも含む遺物包含層の上面からは耕作に伴うとみられる溝があるのみで、以後は耕作地として利用されていたことが確認できた。

以上のように考えられるが、古代の各時期に渡る遺構・遺物がみつかり、古墳時代・奈良時代は集落だったことがわかり、奈良時代は西側を通っていた山陽道に規制された土地区画が行われたことが明らかになったことが大きな成果といえよう。この興戸遺跡に含まれるとみられている官衙（綴喜郡衙か）の中心地の解明など今後の課題が多い。

#### 《参考文献》

- 田辺郷土史会『田辺町郷土史 古代篇』田辺郷土史会 昭和34年(1959)  
江谷寛・栗野謙『北鉢立遺跡』田辺町教育委員会 昭和50年(1975)  
山口博・大槻真純「興戸遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』1980-1 京都府教育委員会  
昭和55年・1980)  
足利健亮『日本古代地理研究』大明堂 昭和60年(1985)  
伊賀高弘「興戸遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第27冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 昭和63年・1988)  
伊野近富「興戸遺跡第6・8次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第42冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 平成3年・1991)  
財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター「田辺町興戸遺跡第11次」(京埋セ中間報告資料 No.91-15  
平成3年・1991)  
ほか田辺町教育委員会『田辺町埋蔵文化財調査報告書』など

平成4年3月30日 印刷

平成4年3月31日 発行

## 興戸遺跡第9次発掘調査概報

-都市計画街路新田辺駅前線予定地の調査-

(田辺町埋蔵文化財調査報告書第15集)

編集・発行 田辺町教育委員会

〒610-03 京都府綴喜郡田辺町大字田辺  
小字田辺80番地

電話 07746-2-9550

印 刷 明新印刷株式会社

〒630 奈良市南京終町3丁目464番地  
電話 0742-63-0661